

令和8年度「全国学力・学習状況調査」大阪市立焼野小学校の結果概要

国語科の平均正答率（62％）は、全国平均（60.9％）を上回る結果となった。一方、算数科の平均正答率（56％）は、全国平均（56.4％）とほぼ同じであった。国語や算数における正答数の人数分布を見ると、やや中位層に集まりが見られ、低位層に比較的分布が多い傾向が見られた。一定の正答率を保ってはいるものの、やや学力が2極化していることが分かる。各設問を見ていると、「知識・技能」より「思考・判断・表現」にかかわる事項において課題が見られた。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

【国語】「読むこと」の平均正答率は73.8％と、全国平均（62.9％）を10ポイント以上上回った。特に、文章の理解に基づき自身の経験と結びつけて記述する問題（3三(2)）では、正答率85.7％（全国76.4％）に達しており、情報を自分事として再構築する力が定着している。漢字の書き取りにおいても、具体的な事物を指す「みじかい」（2三ア）は85.7％と高い正答率を示しており、基礎的な技能は概ね良好である。一方で、同じ書き取りでも「ふしぎ」（2三イ）の正答率は30.2％（全国45.2％）に留まっている。これは、抽象的な概念や心情を表す語彙を文脈の中で正しく使いこなす力に課題があることを示唆している。また、「情報の扱い方に関する事項」において、三つの異なる資料（本「色の効果」「生活と太陽」「夏のくらし方」）から必要な情報を抜き出し、考えを構成する問題（2四）の正答率は39.7％であった。目的に応じて情報を比較・統合する活動のさらなる充実が必要である。

【算数】「数と計算」領域（平均正答率62.3％）は安定している。カードを組み合わせて最大数を作る問題（3(1)）の93.7％や、グラフから割合を読み取る問題（4(4)）の82.5％という結果から、基本知識を既知の場面で活用する力は十分に備わっている。一方、二次元の表から条件に合う人数を読み取る問題（4(3)）の正答率は11.1％（全国17.9％）と極めて低い。これは、単一の表の読み取りではなく「学級別の実人数（表1）」と「アンケート集計結果（表2）」を照らし合わせ、不整合を見つけるといった「情報の関連付け」に強い抵抗感があることを示している。

質問調査より

特筆すべきは、国語の記述式問題（3三(2)）における無解答率が4.8％という低さを示した点である（全国15.6％）。質問紙調査においても「最後まで解答を書こうと努力した」という回答が多数を占めており、本校児童の「粘り強さ」と「自己修復しようとする学習態度」は大きな強みである。

今後の取組（アクションプラン）

漢字は文脈の中で、計算は仕組みを理解した上での定着を目指し、短時間学習の質を向上させる。また、複数の情報の取り扱いにかかわり、例えば国語科の情報の扱いと、算数科のデータの活用を連動させ、学校全体で「情報の関連付け」を意識した授業展開を模索していく。